

小倉百人一首での天皇の和歌に反映された歴史的・文化的な背景

3年4組 62班

研究要旨

私たちは和歌には天皇の気持ちだけではなく、当時の時代的、文化的背景も盛り込まれているに違いないと思った。私たちが興味を持った小倉百人一首の中から、当時の時代で大きな影響を及ぼしていると思われる天皇の和歌八首を選び、時代ごとに和歌を分け、時代ごとにどのような時代的、文化的背景があるかを調べた。その結果、天皇の詠んだ和歌のうち多くのものが何かしらの時代的、文化的背景を持つことが分かった。

キーワード

天皇 小倉百人一首 年中行事 権力闘争

1. 研究の背景と目的

最近漫画をはじめ、競技かるたがブームになっている。百人一首に興味を持った私たちは八首の天皇が詠んだ歌があることに気が付いた。そのような天皇が詠んだ歌を、表面的な意味に理解するだけでなく、時代背景や詠まれた心情などを吟味することができるのではないかと思い、それによって当時の天皇の気持ちを解明しようと思った。

2. 研究手法

まずは和歌を時代ごとに分け、次に和歌の解釈を行い、その中で歴史的、文化的背景が表現されている部分を抽出して、時代ごと、そして総合的にみてどのような傾向があるかを調査した。

(1) 小倉百人一首

1235年ごろ、天智天皇から順徳院に至るまでの歌人百人の和歌を一首ずつ選んだもの。歌がるたとして普及している。選者藤原定家が、京都の嵯峨の小倉山で撰したことに由来する。

(2) 仮説

小倉百人一首の成立が鎌倉時代であるため、天皇が和歌を詠んだ時代は古代（古墳時代後期、奈良時代）、中世（平安時代、鎌倉時代）が中心だと考えられる。古代や中世では国内での内乱が多く、特に中世では武士が大きな力を持ち始めて、天皇の国内に及ぼす力が著しく衰えたという時代背景がある。

3. 結果・考察

(1) 調査 1

和歌には、万葉集に見られるような男性的でおおらかな歌風である「ますらをぶり」と古今集以降の勅撰集にみられる女性的で優美で繊細な歌風である「たおやめぶり」の二つの様式がある。前者は古墳、奈良時代ごろに見られ、後者は、平安時代ごろに見られる。そこで、八首和歌を作られた時代ごとに着目して時代ごとに分けてみた。

結果：

古墳時代 後期、奈良 時代（6, 7 世紀～ 794）	秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露に濡れつつ 天智天皇在位期間（668～672） 春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山 持統天皇（690～697）
平安時代 （中古） （794～ 1185）	つくばねの峰よりおつるみな川の恋ぞつもりて淵となりぬる 陽成院（876～884） 君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ 光孝天皇（884～887） 心にもあらでうき世にながらえば恋しかるべき夜半の月かな 三条院（1011～1016） 瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ 崇徳院（1123～1142）
鎌倉時代 （1185～ 1333）	人もし人もうらめしあじきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は 後鳥羽院（1183～1198） ももしきやふるき軒ばのしのぶにもなほあまりある昔なりけり 順徳院（1210～1221）

考察

- ・鎌倉時代に詠まれた和歌は、作者の思いを直接伝えようとせずに隠喩的に表現していることが分かった。
- ・奈良時代、平安時代では、ますらおぶり、たおやめぶりの様式であり、奈良時代の和歌にたおやめぶり平安、鎌倉時代の和歌にますらおぶりが表れていないことが分かった。

(2) 調査 2

和歌の訳出をしつつ、各時代での・鎌倉時代に詠まれた和歌は、作者の思いや和歌に反映された歴史的背景にどんな傾向があるかを調べるために、各句の歴史的背景を調べることにした。

結果

- ・秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露に濡れつつ 天智天皇
この句を詠んだ天智天皇時代の日本では、大化の改新を通して新しい課税制度が始まり、農民の負担が増え、税の支払いから逃れるために農民の逃亡が相次いだ。この句は天皇がいるはずのない刈穂を納める仮小屋にいる視点から詠まれている和歌で、農民の苦しい気持ちを感じようとする天皇の姿が見られる
- ・春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山 持統天皇
この句では「白妙の衣ほす」というところに文化的な背景が表れている。衣替えの習慣は中国の風習が起源であり、平安時代では宮中行事となる。旧暦の4月1日、または10月1日に行われるが、「春過ぎて夏来にけらし」から4月1日の衣替えであることが分かる。
また、持統天皇が即位していた7世紀末までにも、遣唐使の派遣がおこなわれており、日本でも衣替えをするという習慣は日本の風土にも合い、日本でも浸透していったと考えられる。
- ・つくばねの峰よりおつるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる 陽成院
この句からは、歴史的背景はうかがえない。ただ、この天皇は直情的な性格であり奇行を行っていたために、天皇を廃位された。歌にも、「恋」と直接的に訴えているから、「ますらをぶり」の要素が垣間見られた。文化的背景としては、歌枕として有名だけでなく、歌垣としても有名である。春や秋に男女が集まり、和歌を交換しあう場所として代表的であった。
- ・君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ 光孝天皇
若菜を送る相手への思いやりの歌のようにも見えるが、ここにも文化的背景が見られる。「春の野に出でて若菜つむ」という点から春の七草のように思われるが、光孝天皇が即位していたのは9世紀後半、七草が宮中行事となったのが10世紀頃から行事化し、七草に関する記述が見られるのが「延喜式」の927年で即位から約40年後である。そのためこの句は七草の前身となる若菜摘みであると思われる。またこの風習は日本の古代から存在し、年初めに芽を出した草を摘み取るもので、中国から伝わった旧暦1月7日に7種の野菜を入れた汁物を飲む習慣と融合し、七草の行事が生まれたと考えられている。
- ・心にもあらでうき世にながらえば恋しかるべき夜半の月かな 三条院
つらい世をでも生きていけば、今宵の月も恋しく思えるだろうという意味の歌だ

がこの句の「うき世」になってしまった原因は藤原道長が娘の子を天皇にして道長自身が外戚になろうとするために当時天皇だった三条院を退位させようとして、道長は三条院の目の病気を理由に半ば強引に退位へと追い込んだ。「うき世」とはそんな権力闘争に負けた三条院の自分の心にもなかった理不尽な退位への悔しさと現世への絶望の表現であるのだろう。

・瀬をはやみ岩にせかる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ 崇徳院

この句を詠んだ崇徳院は、弟の後白河天皇との後継ぎ問題から、1156年に保元の乱をおこしたが、破れて讃岐の国にながされた。この句は一見すると恋の歌ととれる。しかし、歴史的背景で白河法皇の隠し子であったため、鳥羽上皇からうらまれる逆境を乗り越えたいという希望の歌ともとれる。1151年に成立したため、島流しという実体験を詠んだものではない説が主流だが、皮肉にも歌の急流という障害と不幸な境遇というを結びつけられる。

・人もをし人もうらめしあじきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は 後鳥羽院

この句を詠んだ後鳥羽院は、当時の政治的権力者として鎌倉幕府との対立に悩んでいた。討幕を決意して1221年に承久の乱を起こすが、敗北。隠岐島に流された。討幕の意図はないものの、1212年に後鳥羽院は、世の中には自分が好意を持てる人間と憎い人間がいて、人を信頼したくても憎い人は思い通りにはならないという考えを、句に反映している。歴史的背景から推測するに、後者の「人」は、荘園問題や相続問題でもめていた鎌倉幕府の事であろう。

・ももしきやふるき軒ばのしのぶにもなほあまりある昔なりけり 順徳天皇

この句を詠んだ順徳院も1221年の承久の乱で流されているが、佐渡に流されている。古典常識より、「ももしき」とは宮中を意味し、「しのぶ草」は荒廃した建物に生える雑草で、「昔」とは朝廷が栄えていた平安期、特に醍醐天皇や村上天皇の延喜・天曆の治世をさす。この句は、軒に雑草が生えるほどうらぶれてしまったことを暗になげき、無常観に浸っている。1221年の承久の乱より前、武家勢力が傾いていることを打開しようとする後鳥羽院の、討幕運動へ向かう1216年に詠まれたことから、端緒が見受けられる。

4. 結論・展望

八首中七首において、政治的な背景、もしくは文化的な背景が見られた。奈良時代、平安時代では、持統天皇や光孝天皇の句で見られるように年中行事に関する言葉が見られ、「秋の田の」「夏来にけらし」「雪は降りつつ」のように季節を表す言葉を直接用いて季節の情景を詠む歌が見られた。また、平安後期、鎌倉

時代では、後継ぎ問題が顕著にみられた。例えば、三条院の歌や、1221年の承久の乱の前に読んだ順徳天皇の句には幕府との不和がかんじられた。そして、時代の変化を通して、奈良・平安前期時代では中国の文化を受容して、のちの宮中行事、年中行事のさきがけにもなる内容が多く含まれており天皇は文化にも強い影響力を持っている存在であった。しかし、平安中期、鎌倉時代となってからは有力な貴族や武士の台頭によって、天皇の政治における力が弱体化し、かつての栄光を嘆く姿や再び大きな力を取り戻そうとする天皇の思いが天皇の詠んだ和歌を通して知ることができた。また天皇だけではなく、武士や貴族などの遺した作品など別の身分の人に対象を変えてみたりすれば、今回とは違う、時代の流れに沿わない独特の傾向を見つけることができるかもしれない。そうすることによって何かしらの大きな共通点を時代や文学、美術などを超えて見つけられるかもしれない。

5. 引用文献・参考文献

「武家と天皇」 岩波新書 今谷明

「天皇と日本の起源」 講談社 遠山美都男

「ちはやと覚える百人一首」 講談社 あんの秀子

「カラー版新国語便覧」 第一学習社 稲賀敬二 竹盛天雄 森野繁夫